

紹介

大牟田章著

『アレクサンドロス大王』

——「世界」をめざした巨大な情念——

アレクサンドロス大王の名前を聞くときに、わが国で一般に抱かれるイメージとは次のようなものではなからうか。ギリシアからイラン、中央アジアを越えてインドにおよぶ空前の大征服をなしたとげ、ヘレニズム時代の幕を切っておとした英雄であり、人類同胞理念をいだいて東西の融合を推進した人物である、と。

このようなイメージが普及したことの理由を、簡単に論じてしまうことには問題があるが、W・W・ターンの研究に代表される、いわば「古典的」なアレクサンドロス像を受容してきたということが、なかなか大きいといわねばなるまい。しかし近年の研究は、そうしたアレクサンドロス像を再考し克服しようとするのを、ひとつの顕著な動向としているようにみえる。あまりにも華々しく、あまりにも理想化され、つとめて合理的な説明をほどこされた結果、ある意味ではあまりにも近代的な人格になりおせてしまったアレクサンドロス——

議論が反対の極に走ってしまうことには、もとより警戒を要しようが、再検討をめざすこと自体には、充分の理由があると思われるのである。

本書の著者もまた、そうした潮流に棹さしつつ、「私自身のアレクサンドロス」を力強いタッチで描き出す。アレクサンドロスの行動の軌跡を、ともに生きるかのようにして辿りながら、彼とはどのような人間であったのか、あの大遠征とは結局のところいったい何であったのか、という問題に肉迫しようとする。

本書のひとつの特長は、けっして無理な解釈をせず、おおかたが納得できる説明の提示に努めているところに認められよう。しかしそれは、著者の意欲がなみなみならぬものであることと、いささかも矛盾しない。著者は史料を丹念に吟味したうえで叙述を進めているが、そのさいブトレマイオス・アリストプロス系の「正史」に対し、*Antagoras* 史料のいうところにも積極的に耳を傾ける——例えばガザにおける復讐行為（九〇頁）や、ペルセポリスでの劫掠・放火（一〇九～一二頁）に関する説明などがそうである。最近までのアレクサンドロス研究の成果は、もちろん十分に消化化されて

いて、アリストテレスが家庭教師として招かれたことの政治的背景（二四～二八頁）や、ピリッポス二世暗殺の背後関係（四一～四四頁）などについての有力な推論にふれたり、このところ脚光を浴びているアイ・ハヌム遺跡をとりあげて、アレクサンドロスがつくりだした「開かれた世界」の意義を論じたりする（二一九～二〇頁）。

著者はアレクサンドロスを、「未知なるものに対する抑え難い衝動」にかられ、武力征服をおのれの「誉れ」^{ポトス}として飽くことなく追い求めた稀有の個性としてとらえ、そうした比類のない個性が躍動し燃焼するさまを、確かな筆致で生き生きと描いている。著者の熱意は行間にあふれ、読むのを瞬時も倦ましめない。頁数こそ多くはないが、密度の高い、すぐれたアレクサンドロス伝である。

（B6判 二三五頁 一九七六年三月 清水書院 四三〇円）

（大戸千之 立命館大学助教授）

山中共古著

『甲斐の落葉』

本書の著者山中共古は、本名を笑といい、嘉永三年（一八五〇）、江戸に幕府御家人